

共通教育「学習支援実践Ⅲ(日本語)」の試み

--- 日本語チューターへのサポートをめぐる ---

吉田 悦子 (三重大学人文学部)

福岡 昌子 (三重大学国際交流センター)

1. はじめに

本稿は、2012年度に新しく開講された共通教育における統合教育科目「学習支援実践Ⅲ(日本語)」の授業の取り組みについて報告するものである。

この授業を開講した背景を述べる。留学生への学習支援の一環としてチューター制度があり、新たに渡日した留学生は日本人学生のチューターサービスを受けることができる。しかしながら、実際のチューター学生の運用については、各学部あるいはそれぞれの留学生指導教員に委ねられている。日本語チューターの活用は重視されているにもかかわらず、果たして留学生のニーズに合った支援として機能しているかを確認したり、チューター学生が必要なときにアドバイスを得られるような安定した仕組みは今のところない。また、チューター同士で連携したり、共同学習や情報交換をできるような共有の場はなく、個人の創意工夫に任されているのが現状である。日本語を留学生に教えることが全くはじめてという学生に対して、何をどう教えればよいか、チューターとして留学生とのコミュニケーションの際に何を心がけたらよいか、などの多くの不安を少しでも解消し、チューター活動を支援する授業実践があれば、チューター希望者も増えるのではないかと思います、この授業を立ち上げた。

留学生が日本語チューターに求めるサポートは日本語学習や授業、研究支援にとどまらず、生活面や交友関係まで幅広い。つまり、日本語チューターには日本語を教えるスキルと同時に、異なる文化的背景をもつ留学生とのコミュニケーションスキルも必要とされている。

本稿の構成は、まず、2012年度の授業シラバスを提示して、授業の目的と概要について述べる。次に、前期授業での取り組みを振り返りながら、その成果をまとめる。最後に問題点と反省点にふれると共に、次年度への課題を整理する。

2. シラバス

まず、シラバスではこの授業の概要について、次のように説明している：

「三重大学に在籍する留学生の日常的な日本語コミュニケーション力の習得を支援し、大学で必要とされる日本語力のスキルを高

めていくための実践を通して、留学生向けの日本語学習支援能力を育成する。」

つまり、授業では、日本語が母語ではない留学生の日本語コミュニケーション力の習得を支援するための技術と方法を学びながら、留学生参加型の協働学習を実践することを目指したいと考えた。

次に、学習の目的（一般目標）には3つを掲げた。

1. 日本語が母語ではない留学生に対して日本語を教える力を養うことができるようになる。
2. ことばを教えることで母語に対する知識やコミュニケーションの原理についてより深く学ぶことができるようになる。
3. 三重大学に在籍する学生の多様性に対して共感し、日本語と日本文化の伝達を通して、相互に国際性を高めることができるようになる。

授業のキーワードは「日本語」「支援」「留学生」「チューター」として、授業を通して、以下の4つの実践を組み合わせさせていただくことを示した。

1. 三重大学に在籍する留学生の日本語コミュニケーション力と学習スキルの把握
2. 留学生向けの日本語学習支援能力向上のための学びと実践
3. チューターとして留学生を支援するためのコミュニケーション活動の実践
4. 「留学生カフェ」での交流支援活動

なお、学生には、あらかじめ受講が望ましい科目として、「4つのカスタートアップセミナー」「キャリアプランニング」「留学生支援実践」の授業をとることを推奨している。

3. 授業運営

3.1 授業計画とその修正

当初の授業計画は、新学期に渡日した留学生に授業に参加してもらい、日本人学生とのグループ学習を念頭においたもので

あった。授業初日に提示したシラバスに書かれた授業計画を以下にあげる：

「この授業は、日本人学生と留学生によるペア・グループワークとディスカッションを進めます。

前半は、自己紹介、インタビュー、自己PR：「伝えたいこと」などの活動を通して、留学生が日本で困ったことや、どんな場面での日本語使用に困ったかなどをインタビューしながら、必要な日本語コミュニケーション力をサポートする方法を探ります。

後半は留学生との共同プロジェクトとして、「ブックレポート」の作成をおこないます。「ブック」でなくても構いませんが、情報の収集と整理、テーマや内容の検討、アウトライン作成、ポスター製作、口頭発表までのプロセスを協同で話し合いながらおこないます。これはグループのメンバー同士の「教え合い」学習、ピア学習の実践となる作業です。この作業過程で、留学生に授業に必要な日本語力とは何か、どんなスキルを身につける必要があるかを学んでもらうためのサポートをします。」

これに基づき、前期16回の授業スケジュールはおおよそ次のようにした：

- 1 オリエンテーション
- 2～4 留学生の日本語力をどうやって把握するか。
必要な日本語力を習得するにはどんな学習方法がよいか。
- 9～14 発表テーマを決めてレポート作成、スピーチ、ディスカッション力を学ぶ。
- 15～16 発表会・反省会と今後の課題

さらに、前期は4月、5月、6月、7月の第4週の授業日を留学生カフェと重ねて、受講生の参加を義務づけると共に、この運営についても一部担当させた。また、留学生カフェは、授業の進行に応じて貴重な発表の場としても活用された。

しかしながら、実際に、継続して授業に参加する留学生は毎回1～2名であり、事前に呼びかけてその時間があいている留学生に参加してもらい、日本語や日本での生活についての声を授業に少しずつ反映させながら進めた。そして、留学生もグループ活動に参加してもらいながら、「留学生が求めている支援とは何か」を、日本語学習とそれ以外の支援とに分けて、具体的なニーズを探っていくことになった。受講生の中には一名の中国人留学生がおり、その発言は日本人学生とは異なる視点を提供することが多く、貴重なケースとなった。

3. 2 授業活動の流れ

3. 1 で示した授業スケジュールを具体的に報告する。

(1) 4月11日 オリエンテーション

各自にテーマを与え、自己紹介をおこなった。テキストの使い方、課題の提出方法、ペア、グループ編成についての説明をおこなった。3名の留学生が参加した。

(2) 4月18日 日本語で困る場面とは？：留学生の日本語力をどうやって把握するか。留学生への日本語アンケートを作成し、グループ活動の中で留学生へのインタビュー：「日本で最初に困ったことは何ですか？」をおこない、その結果を報告しあった。

(3) 4月25日 留学生カフェ：「あなたの日本語サポートします」受講生は、留学生向けに授業参加者募集のアナウンスをおこなった。

(4) 5月2日 カフェの感想と報告。

留学生の日本語コミュニケーション力の育成について：何を教えたらいいか、が大切である。簡単なプレイスメントテスト（話す・書く）を活用して、留学生の学習レベルを把握する方法を試みた。さらに留学生との文通やスピーチ活動を支援する実践活動の報告がなされ、実際に電子メールを通して留学生の日本

授業風景

グループ活動は、担当教員やSAがサポートします

それぞれのグループには、留学生も積極的に参加します。



語をチェックする活動をおこなった。

(5) 5月9日 留学生の日本語コミュニケーション力の育成について、留学生スピーチ大会の様子をビデオ録画したものを視聴し、スピーチの内容とその伝え方に関する評価について話し合った。

(6) 5月16日 自己PR：作成とスピーチの準備。

実際に留学生にスピーチの実践をしてもらい、その様子について話し合いをした。

(7) 5月23日 留学生のスピーチと質疑応答、話し合い。

(8) 5月30日 留学生カフェ：「日本で困ったこと、日本語で困ったこと：こうやって解決しよう」

このカフェでは4つの班に分かれてそれぞれが活動してきた中間報告として、こんな支援はどうだろうかという試みをポスターで提示し、参加者からの「共感度調査」を聞き取りでおこなった。

4名の留学生のケースそれぞれについて日本語学習方法を提案しました。

発表風景

フリップチャートによるB班のディスカッション風景



共感する、しないのスケールにラベルを貼る・ポストイットでコメントを寄せる

フリップチャートによるC班のディスカッション風景

フリップチャートによるD班のディスカッション風景



(9) 6月6日 カフェの反省をおこなった。そして、後半の活動として、「留学生の日本語支援として私たちにできることって何だろうか」という課題を設定し、留学生のニーズに応えるため、いろいろな案が出された。最終的に以下のような3つのサポートに結びつき、3グループで分かれてプロジェクトとして取り組むことになった。

1. チュータリングサポート：日本語支援とアンケート調査
2. 生活密着型サポート：留学生のためのガイドブックとマップ作成
3. 交流型サポート：交流パーティ

活動プロジェクトの決定後は、この3つのグループに分かれての活動が中心になった。

- (10) 6月13日 グループメンバー決めと計画
- (11) 6月20日 グループ活動
- (12) 6月27日 留学生カフェ参加
- (13) 7月4日 グループ活動
- (14) 7月11日 グループ活動(発表準備)
- (15) 7月25日 留学生カフェ：発表
- (16) 8月1日 予備日(報告書作成)

3.3 授業で使用した教材

教科書は以下のものを指定した：

大島弥生ほか「ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション」ひつじ書房(2012年)

3.4 成績評価と基準について

成績評価は、個人活動(1)とグループ活動(2)を以下のように組み合わせた：

- (1) 出席 25%
学習課題 25% (*課題の内容は以下を参照)
- (2) グループ活動課題 25%
活動への参加度・貢献度 25%

(1)の学習課題は、各授業やグループ活動の進度に応じて適宜指示した。全員共通の課題は以下の2つである：

1. 授業内容と進捗状況により、授業活動の振り返りについて moodle 上で報告。(5回分)(10%)
2. テキストの日本語エクササイズ提出用シートを毎回提出。(15回分)(15%)

3.5 受講人数

受講人数には、制限を設けた。少人数学習が必要なため受講生は20名に限定した。キャリア・ピアサポーター上級資格を目指す人または留学生のチューターとなっている人を優先とした。最終的な受講人数は15名で全員が合格した。

3.6 担当SA

授業には2名のピアサポーターであるSA(学部生の授業アシスタント)に参加してもらった。彼らは15回すべての授業に参加して、受講生のグループ活動をモニターしながら、適宜、議論のサポートや実質的な助言、時間管理などのファシリテーターの役割を受け持った。SAを授業の中で活用するメリットはこうした実際的な側面が大きい。今回のように、授業を共に作り上げていくというプロセス重視の授業形態においては、教員とのパイプ役にとどまらず、彼らが受講生にあたえる心理的な効果というものも多く働いているといえる。つまり、受講生と年齢的にも心理的にも近い立場から、受講生の状況や変化をとらえやすい面がある。事実、SAから、受講生に対するコメントにおいては、担当教員が気づかない細かな事柄や、グループワークの中で観察された受講生たちの授業態度への変化への指摘が多くあった。たとえば、グループの中に参加している留学生への配慮や気遣いに関する観察や、受講生の学習意欲へのコメントなどが見られた。

4. 成果

4. 1 3つのプロジェクトの成果

まず、3つのプロジェクトの成果について簡単に報告する。それぞれ7月の留学生カフェでの成果報告での発表タイトルをあげる。

1. 留学生の求めるサポートとは

～留学生へのアンケートから～

このプロジェクトは、留学生48人を対象にアンケート調査をおこない、その結果を分析、考察するものである。日本語レベル別に日本語学習の課題や問題点が異なること、日本語について相談する相手は、日本人ではなく同じ国の友人が多いこと、日常生活では、大学のイベント情報などを手に入れるのに困難を感じていること、など複数の興味深い結果が得られた。

2. 夏休み わくわくゲットだぜ☆

～ガイドブックできました～

このプロジェクトは、三重大大学の留学生向けに、大学生活がより充実するような情報提供として、三重県とその周辺の地域に密着したイベントやアクセス情報を盛り込んだ、ガイドブック(20ページ)の企画作成のプロジェクトとした。ガイドブックの企画書を作り、情報収集と編集作業を分担しておこない、在籍および新渡日の留学生向けに400部を印刷した。この費用については大学からの援助を受けた。

ガイドブックの表紙



3. ホット会!

～つくって食べて交流しよう♪～

留学生と日本人学生とが、継続した関係を築くにはどうしたらよいかという視点で話し合いを重ね、交流会を企画した。たこ焼きを一緒に作って食べる、という経験を共有することで、親密さが高まり、買い出しから後片付けまで全員が分担する共同作業を楽しむことができた。交流が継続するためのアイデアも随所に盛り込まれ、パーティの様子は、留学生カフェで報告

された。また、後日プロジェクトの概要は報告書にまとめてmoodle上に掲載された。

交流会の様子



4. 2 受講生の取り組みから得られた成果

「留学生の日本語支援とは」「日本語チューターの役割とは」という問いかけから始まった授業だったが、留学生のニーズは多岐にわたり、それに伴い日本語支援も異なる。なによりも、留学生にとって日本人学生と交流する機会が少ないため、留学生のニーズがつかみにくいことをどのように克服するかに焦点があてられた授業となった。したがって、留学生の日本語支援は留学生の学習支援、あるいは生活支援の一環としておこなうのが効率的であること、そして、求められる支援も留学生一人一人異なっていることを実感できたのは貴重な成果といえよう。

初めての試みゆえ、授業運営についての試行錯誤が教員、受講生共に続いた。授業後にはほぼ毎回、担当教員とSA、学生総合支援センター長による反省会と次回の授業についての打ち合わせがおこなわれた。しかしながら、留学生のニーズをめぐって最も真剣に頭を悩ませたのは受講生たちであり、「わたしたちに何ができるか」という問いかけに真摯に応えようとしてくれた。彼らの意見交換の場にはmoodleが活用されたが、さまざまな視点からの意見が寄せられたことは有意義であった。ここに一部を紹介する：

「私が最も避けたいのは、日本人学生の独りよがりになった支援じみたことです(言葉が悪くてすみません。)支援というのはニーズがあってこそ成り立つものだと思います。ですから、有難迷惑で終わりたくありません。その一方で、日本人学生にとってもやりがいのある、満足のいく内容にしたいと思います。」
(Nさん)

「留学生が一番困っている時期は、日本に来たばかりの時です。多くの留学生は日本に来る前に日本語の勉強をしますが、会話があまりできないという人が多いです。それを解決するため、多くの留学生は日本人の友達を作りましたが、

日本人と関わる機会があまりありません。実践を通して、日本人と留学生が関わる機会をたくさんつくり、日本人と触れ合いながら日本を、そして日本語を知っていくのがいいのではないかと思います。」(留学生Pさん)

「私は『留学生の本当のニーズ』に答えたいです。留学生の学習支援を中心とした様々な取り組みの多くは、留学生に対して一貫して行われるものです。もっと留学生一人一人の声を聴く必要があると思います。またそのために留学生に気軽に悩み相談ができる場を提供したいと思います。個別に対応していくことでより丁寧できめ細やかなサポートができるのではないかと考えました。」(Mさん)

また、留学生カフェやチューター経験を通して得られた留学生の声から、支援の方法を考える学生もいた。

「留学生の需要を知るために、一斉アンケートをして実際に留学生がどのようなサポートを求めているのかを聞きたいです。

(中略) 同時に、日本語支援を第一に考えるなら、会話練習のサポートがいいと思います。実際に留学生から『書くこと読むことは授業でやるので、実際の会話練習がしたい』ということを知りました。また、『丁寧な言葉は授業で習うので、自然で日常的な会話がしたい』ということも聞きました。」

(Yさん)

「ある留学生がパーティを開いて交流することは楽しくていいが、パーティだけでの関係で終わってしまうことが多いから、パーティの後に授業とは関係なく遊びに行けるような関係になりたいと言っていた人がいて、わたしはそういう関係を作れるようなプロジェクトをしたいです。」(Tさん)

さらに、留学生支援のためのスキルと共に、SAの資格にふさわしい能力の獲得に取り組もうとする姿も見られた。留学生を支援する事で、サポート側である自らの能力も向上していくことに気づき、すぐに成果が見えなくても、継続性がある支援こそが有益であると考えることができている。

5. 反省点と今後の課題

2012年度の授業活動について振り返り、その過程と成果を報告した。3つの学生プロジェクトは、日本語学習支援とそれ以外の留学生支援とを明確に区別することが難しいという現状を反映している。チューターに求められるニーズの多様化に対応することを重視した活動として、それぞれ貴重な取り組みといえる。しかし一方で、本来の授業の目的であるチューターへのサポートである日本語学習支援のためのスキル養成を授業活動の中心にすることができなかった。何より、個々の留学生が

必要としている日本語学習の課題にどう向き合うかを議論する余裕がなかったことは反省点である。2013度には、留学生のニーズに合わせて提供できる日本語学習支援とは何かをさらに模索しながら、チューター学生に身につけてもらいたいコミュニケーションスキルの向上に取り組みたい。また、同時に三重大学のチューター制度における現状と課題という視点から、チューター学生、留学生、教員それぞれがかかえる問題についても一考する必要があるだろう。

謝辞

学生総合支援センター長の中川正教授には、授業の準備段階から授業の理念構築と運営全般について、実質的なご協力と有意義な助言を多くいただいた。ここに記して感謝申し上げます。また、この授業の学生プロジェクトに対して快くご支援いただいた留学生支援室のスタッフの皆様にも心より感謝したい。